

★学校教育目標	健康でたくましい子供 ・美しいゆたかな心の子供 ・深く考えやりぬく子供 ・力を合わせて励み合う子供	★重点計画の概要
★目指す学校像（ビジョン）		プロジェクト名：「『子供たちがつくる学校』プロジェクト」 「子供たちが、自分たちの学校を自分たちの力でつくる」活動に取り組むことを通して、これからの社会の中で自立して生きる力の基盤を育む。そのために、次の4点を基本方針とする。 ①「AARサイクルを自ら回し続け、課題を解決する力」の育成 ②「仲間と協働的に関わり、集団の中で自分を生かす力」の育成 ③「心身共に健康で、運動を通して自らの生活を豊かにする力」の育成 ④「自他の生命を大切にし、多様な他者とよりよく生きる力」の育成
【目指す子供像】	・自ら課題を設定し、自分で考え、判断し、行動して課題を解決する子供 ・自他の課題解決と創造のために協働できる子供	
【目指す学校像】	全ての子供の活躍の舞台（楽しいこと、夢中になれるものがあり、楽しい仲間と大好きな先生に自分のよさが認められ、一人一人が安心して力を発揮することができる学校）	
【目指す教師像】	・子供の理解に努め、認め励まししながら、子供と共に実践する教師 ・自らの資質向上に努め、子供の生きる力を育むことができる教師	

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準				学校評議員・学校運営連絡協議会の意見	結果の分析と改善策
				評価点	取組指標	評価点	成果指標		
みんなが当事者として、自ら歩む道をつくる	主体的・対話的に深く学ぶ子供の育成	子供が自らの目標をもち、自分のペースや自分に合った方法を選んで学習活動に取り組めるようにする。 （「個別最適な学び」の実現）	・学習履歴等から子供一人一人の習熟度を把握し、ＩＣＴ機器等を活用して、個別に最適な学習を推進する。 ・個々の学習の目標を設定したり、個人やグループ等で学び合ったりしながら、自分に合った学習方法を選択して学習に取り組めるようにする。	3	4 具体的方策に教員の９０％以上が取り組んだ。	3	4 ９０％以上の子供が、肯定的な評価をした。	ＩＣＴを活用した個別最適な学びの推進については、教員によって個人差が生じることが考えられる。子供がＩＣＴも活用しながら、自ら学習を調整して学んでいくことができるよう、「個に応じた指導」を充実させていきたい。今後も研修等で「個別最適な学び」についての理解を深め、実践につなげていくことが求められる。	個別最適な学びについては、教員の授業改善が成果をあげ、子供に目標や方法を自己決定・自己選択して「自らの学びをつくっていく」という意識が育ってきている。今後は今年度の教育活動の継続と共に、ＩＣＴ機器の活用等も取り入れながら、子供を主体的な学びへ導く取り組みを一層充実させていく。
		子供同士が協力して学び合い、仲間とともに課題を解決していく学習活動に取り組めるようにする。 （「協働的な学び」の実現）	・「できた・わかった・高まった」が実感できるよう、協働して課題解決する活動を工夫する。 ・自分の考えを発表・交流する場を効果的に設定し、自分の考えをもち、友達に伝え、互いのよさや違いを理解し、学び合い高め合うことができるようにする。		3 具体的方策に教員の８５％以上が取り組んだ。		3 ８５％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					2 具体的方策に教員の８０％以上が取り組んだ。		2 ８０％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					1 具体的方策に取り組んだ教員が８０％未満であった。		1 肯定的な評価をした子供が８０％未満である。		
みんなの多様な学びとしあわせをつくる	自他のよさや違いを認め、共に高め合える子供の育成	自分たちの学級・学年・学校をよりよくしていこうとする実践力を育てる活動を行う。	・学級会における話し合い活動を充実させ、話し合って決めたことを実践し、結果について振り返る活動を実施する。 ・係活動や実行委員会等を充実させ、自分たちの学級や学年をよりよくしていくための自治的な活動に取り組めるようにする。	3	4 具体的方策に教員の９０％以上が取り組んだ。	3	4 ９０％以上の子供が、肯定的な評価をした。	低学年においても90％以上の子供が「学級や学年をよりよくしていこうとしている」と回答していることは、学年や学級での取り組みを充実させた指導の成果である。学級会等における話し合い活動の事前や事後の指導も丁寧に行い、少数意見も大切にしたものとなるように、互いに認め合う雰囲気をつくっていただきたい。	「今よりもっと楽しい学校をつくる」を子供と教員の共通の目標として、各学級において様々なテーマで話し合いを行い、その結果を学校生活の中で実践する活動が行われた。今年度、子供が自ら学校生活をつくっていかこうとする素地が養われた。来年度も、仲間や教職員と共に学校をよりよくしていこうとする挑戦意欲を高めていく。
					3 具体的方策に教員の８５％以上が取り組んだ。		3 ８５％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					2 具体的方策に教員の８０％以上が取り組んだ。		2 ８０％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					1 具体的方策に取り組んだ教員が８０％未満であった。		1 肯定的な評価をした子供が８０％未満である。		
	多様な他者を尊重し、協働できる子供の育成	発達の段階に応じた各学年の役割を果たし、様々な仲間と共に「集団をつくる活動」に主体的に取り組む活動を活性化する。	・なかよし班活動やクラブ活動等、異学年での交流活動を充実させ、責任感や思いやりの心、協力し合う態度を育てる。 ・委員会の活動を活性化し、子供と教員が共有する目標「今よりもっと楽しい学校をつくる」やSDGsをテーマとした活動等の全校的な取り組みを実施する。	4	4 具体的方策に教員の９０％以上が取り組んだ。	3	4 ９０％以上の子供が、肯定的な評価をした。	「異学年交流による責任感や思いやり、協力し合う態度の育成」に関する教員の肯定的な回答が96.9％と、全調査項目中で最も高い数値を示している。しかし、中学年の子供の肯定的な回答が低・高学年と比べて低いことから、学年や学級での取り組みだけでなく、「なかよし」等における異学年交流での中学年の役割を明確にする必要がある。	今年度、なかよしや委員会活動において、子供発信による様々な取り組みが行われた。子供が話し合ったことを実行し、その成果を実感できる活動が行われた成果である。保護者からも約90％の肯定的評価も得ており、成果が保護者へも伝わっている。来年度は、中学年にも役割をもたせたり、SDGsをテーマとした取り組みを工夫したりしていく。
					3 具体的方策に教員の８５％以上が取り組んだ。		3 ８５％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					2 具体的方策に教員の８０％以上が取り組んだ。		2 ８０％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					1 具体的方策に取り組んだ教員が８０％未満であった。		1 肯定的な評価をした子供が８０％未満である。		
社会と未来に関き、みんなでつくる	多様な他者を尊重し、協働できる子供の育成	保護者・地域との連携及び協力を推進し、教育活動の充実と安全を確保するための取組を行う。	・地域人材を生かした教育活動を積極的に実施する。保護者や学校地域コーディネーターと連携を図り、子供たちにとって有意義な活動を設定する。 ・多様な体験的活動の場を設定したり、地域とのつながりを生かした教育活動を展開したりする。	3	4 具体的方策に教員の９０％以上が取り組んだ。	4	4 ９０％以上の子供が、肯定的な評価をした。	中学年においては、総合的な学習の時間において、「自分の課題を見付け、仲間との協働によってその課題を解決した」と回答した子供の割合が、低・高学年よりも高い。地域での活動の成果を子供たちが実感していることがうかがえる。今後は各学年で身に付けさせたい力を系統的に捉え、各学年の活動内容を検討し、整理していくとよい。	今年度の校内研究の成果として保護者や地域の方々と共に生活科・総合的な学習の時間の活動を実践できたことが挙げられる。今後は、学校全体で地域との関わりを深められる学習を、計画的に実践・発信し、保護者・地域との連携をより一層深め、さらに有意義な教育活動を展開していく。
					3 具体的方策に教員の８５％以上が取り組んだ。		3 ８５％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					2 具体的方策に教員の８０％以上が取り組んだ。		2 ８０％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					1 具体的方策に取り組んだ教員が８０％未満であった。		1 肯定的な評価をした子供が８０％未満である。		
	多様な他者を尊重し、協働できる子供の育成	通常の学級・特別支援学級・特別支援教室との連携による教育活動を推進するとともに、特別支援教育を充実させる取組を行う。	・教員間で連携を取り、保護者との連絡を密にしながら、子供が感じている学校生活上の困難さに対する支援体制を充実させる。 ・たちばな学級との交流を中心に据え、様々な交流及び共同学習を実施する。	3	4 具体的方策に教員の９０％以上が取り組んだ。	3	4 ９０％以上の子供が、肯定的な評価をした。	学校は保護者との連携を密にし、関係機関とも連携して、子供の課題の解決や子供の個別の状況に応じた支援にあたり、組織的に対応することができている。子供の困難への対応を充実させていくためには、ケースごとにその内容に最もふさわしい専門性をもつ機関等と連携して支援していく必要がある。	「子供の困り感への対応」は教員の94.5％が肯定的に回答しており、教員間の連携を密に子供の課題への対応が行われていると言える。また、たちはな学級の閉級に当たり、通常の学級・あおぞら学級との積極的な交流活動が計画的に実施され、成果を挙げた。来年度はつばめ学級の新設を踏まえ、多様性を認め、尊重し合う教育活動を具体化していく。
					3 具体的方策に教員の８５％以上が取り組んだ。		3 ８５％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					2 具体的方策に教員の８０％以上が取り組んだ。		2 ８０％以上の子供が、肯定的な評価をした。		
					1 具体的方策に取り組んだ教員が８０％未満であった。		1 肯定的な評価をした子供が８０％未満である。		